

京都の舌状段丘における庭園の水源と水みちに関する研究*

A study of the source and watercourse in the Japanese gardens and their surroundings

which are located on their bench in Kyoto*

藤原剛**、出村嘉史***、川崎雅史****、樋口忠彦****

By Takeshi FUJIWARA**・Yoshifumi DEMURA***・Masashi KAWASAKI****・Tadahiko HIGUCHI****

1. 研究の背景と目的

近年都市空間における水環境が果たす役割が注目され、水を媒介として都市の新しい地域づくりの場の再生が試みられると同時に、アメニティ空間としての水辺のデザインがなされている。例えば京都においても、「堀川水辺環境整備事業」のように清流を再生し地域づくりを試みる事業が見られる。しかし、その前提となる水の豊かさについて、京都では明治時代の琵琶湖疏水開発の恩恵は大きい、それゆえにかつて京都を潤していた湧水に対する意識の低下が感じられる。本研究は、このような近代開発の影響を除いた本質的な水源と水みちの現状把握と、水源を涵養する自然環境要因の追求を背景とする。

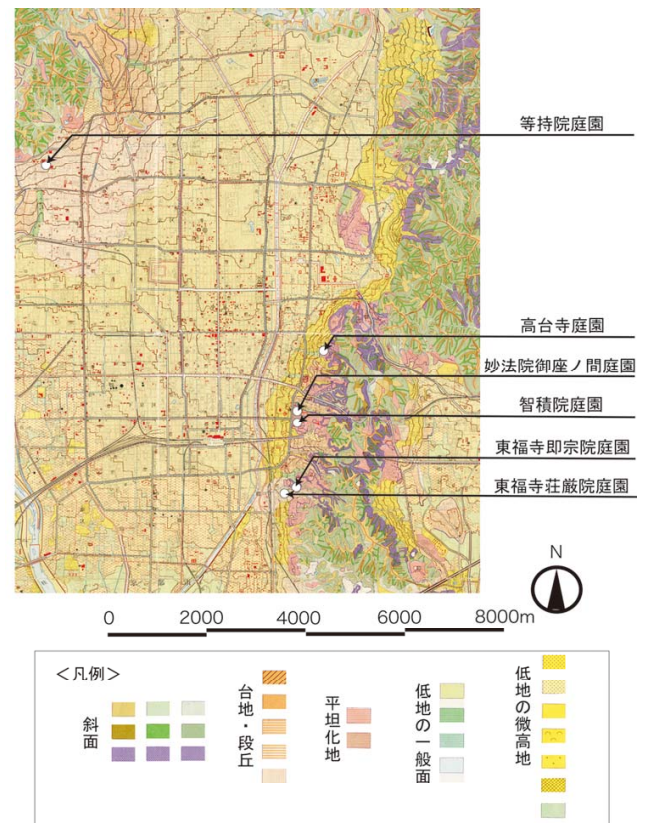
本研究では、京都において歴史性を有する庭園に着目し、その水源と水みちを詳細に把握することで、京都における水源と水みちの現状と、その潤を左右する要因を明らかにすることを目的とした。

また対象地に関しては、嵯峨野や宇多野に例が見られるように、特に野において平安時代から多くの天皇・貴族が別業を営んでおり、そこにかつては湧水や水みちなどの自然条件を利用していた庭園が比較的多く存在している。さらに、野地名はその微地形構造を分析すると、山麓から比較的距離のある位置に凸状の等高線が見られるような、舌状段丘にあたるものが多い¹⁾。従って、本研究は微地形構造に着目して地形を把握した際、舌状段丘と考えられる地形に位置する庭園を対象とした。

2. 対象地および研究手法

(1) 本研究の対象地

図1に示すように、衣笠山山辺に位置する等持院庭園、東山山辺に位置する高台寺庭園・妙法院御座ノ間庭園・智積院庭園・東福寺即宗院庭園・莊嚴院庭園の6カ所の社寺庭園を本研究の対象地とした。



図・1 対象地の位置(下絵は土地条件図²⁾)

(2) 研究手法

本研究では、対象庭園の微地形構造を1:2000スケールで把握した。また、庭園の水源と水みちに関しては、対象庭園に対するヒアリング調査や現地踏査を軸として、地名に関する文献³⁾をもとにした地名の由来の追跡や、社寺庭園に関する文献⁴⁾・古地図・古絵図^{5)・7)}・古写真などにより、過去から

*キーワード：景観、親水計画、空間整備・設計

**学生員、工修、京都大学大学院工学研究科

(京都市左京区吉田本町、TEL&FAX 075-753-5123)

***正員、博(工)、京都大学大学院工学研究科

****正員、工博、京都大学大学院工学研究科

現在にかけて詳細に把握した。ヒアリングの際の調査項目は以下の通りである。

- ・ 作庭当時から現在までの庭園の水源の変遷
- ・ 近年の水量および水質の変化と生態系
- ・ 社寺庭園周辺の水みちの歴史的変遷

3．対象地の立地分析

(1) 等持院庭園

等持院は、図2に示すように、衣笠山の山裾から少し離れた緩やかな段丘に位置しており、庭園は南北朝時代に作庭されたと考えられている。

かつては衣笠山の湧水が山裾に大きな池を作り、その池が水源となり園池を潤していた。しかし、昭和35年頃の立命館大学および観光道路の開発により池は埋め立てられたため、現在は水源を失っており循環水と井戸水を代用している。



図2 等持院周辺の水みちの様子（筆者作成）

(2) 高台寺庭園

高台寺は、図3に示すように、霊山山麓の尾根裾の比較的高低差の大きな段丘に位置し、かつては暴れ川であった菊谷川に隣接している。また庭園は江戸初期に作庭されたと考えられている。

現在は菊谷川上流部から取水しており、谷壁面に沿って設置された非常に長いパイプによって、谷水を東西の園池に導いている。

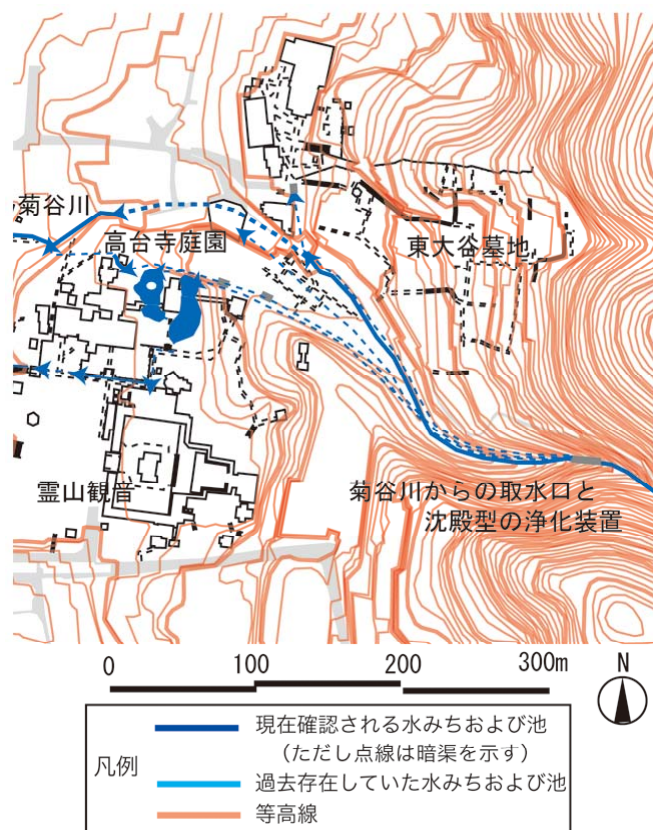


図3 高台寺周辺の水みちの様子（筆者作成）

(3) 智積院庭園

智積院は、図4に示すように、阿弥陀ヶ峰の尾根裾に広がる緩やかな段丘に位置し、大正・昭和の地形図では蛇ヶ谷を通る水みちが確認できるが、現在は周辺開発により埋め立てあるいは暗渠化されている。庭園は江戸初期に作庭されたと考えられているが、昭和初期の火災で園池は縮小している。

かつて水源は、庭園東部に存在した大きな池であったと考えられているが、周辺開発の影響により水源は絶たれ、現在は水道水に依存している。

(4) 妙法院御座ノ間庭園

妙法院は、図4に示すように阿弥陀ヶ峰の尾根裾

に広がる緩やかな段丘に位置し、御座ノ間庭園は隣接する積翠園の名残りと伝えられており、江戸初期の作庭とされている。

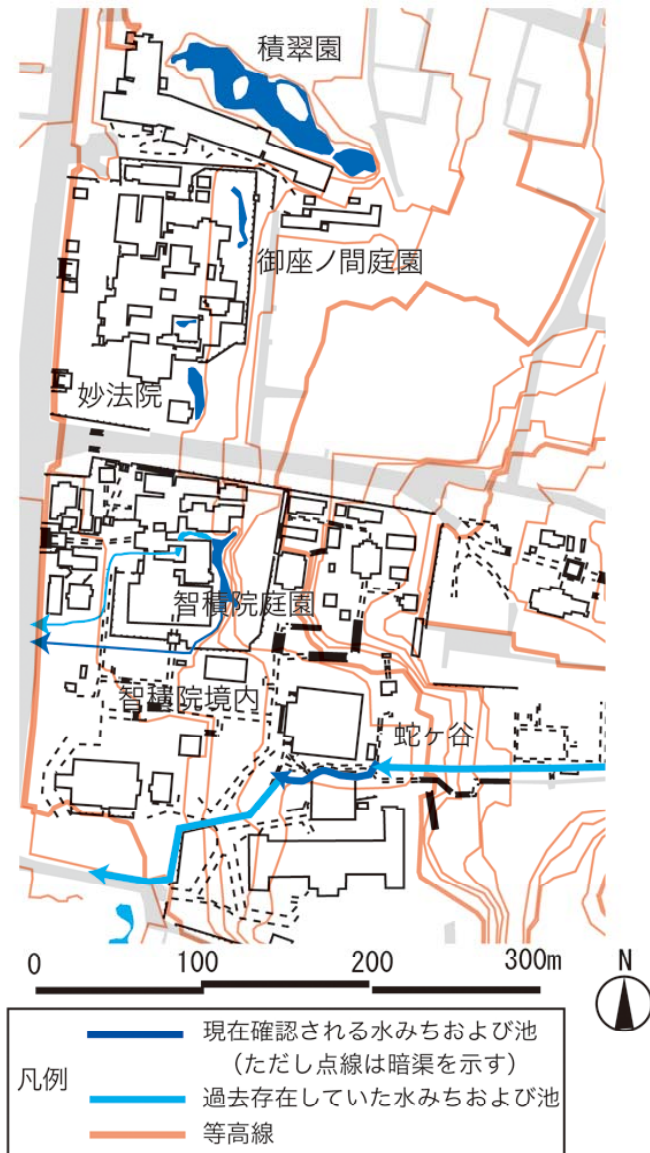


図4 妙法院・智積院周辺の水みちの様子(筆者作成)

昭和後期に妙法院の所有であった積翠園が日本専売公社に売却された際の病院建設により、積翠園から御座ノ間庭園の園池に流れ込んでいたと水みちが消失したと考えられており、現在は水道水によって管理されている。

(5) 東福寺即宗院庭園

東福寺即宗院は、図5に示すように、月輪山山麓の緩やかな尾根に東西に広がる緩やかな段丘に位置し、南は三ノ橋川の渓谷があり、北は急傾斜の谷壁斜面に挟まれている。また鎌倉時代の月輪殿の跡と考えられており、庭園はその跡地を利用して室町後期に作庭されたと考えられている。

水源については、かつて即宗院東部周辺の湧水を起点とした水みちが園池を潤していたと考えられ、庭園は図6のように『都林泉名勝図絵』に描かれるほどの名園であった。しかし水源付近の住宅地開発により水みちは消失し、現在は雨水に依存するのみで雨量の少ない時には干上がる。(写真1)

(6) 東福寺莊嚴院庭園

東福寺莊嚴院は、図5に示すように、月輪山山麓の尾根裾の緩やかな段丘にあり、庭園は、作庭年代は不明であるが近世には図7のように『都林泉名勝図絵』に描かれていた名園であった。

水源について、かつては東福寺の境内東部からの水みちが塔頭を通過し園池に注いでいたと考えられているが、現在水みちは暗渠化されており園池は干上がっている。(写真2)

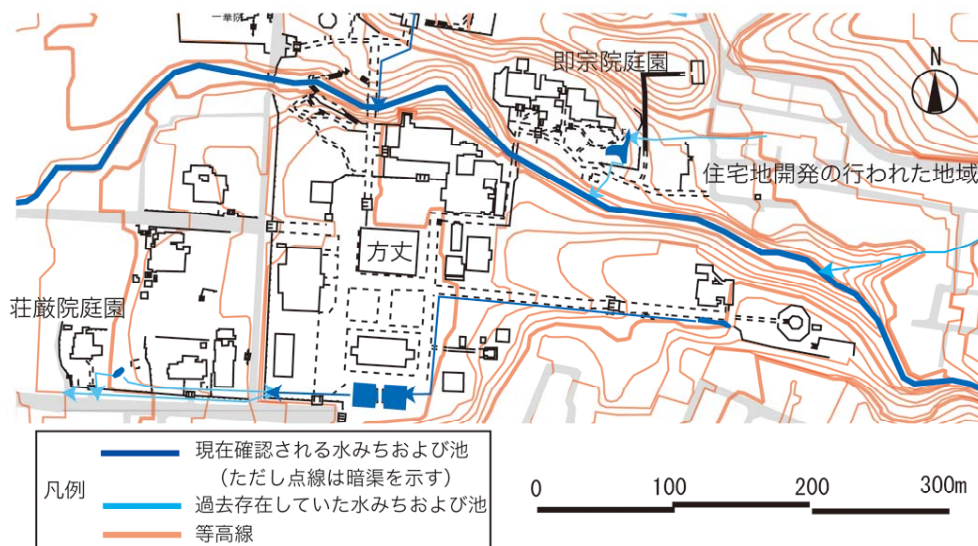


図5 東福寺周辺の水みちの様子(筆者作成)

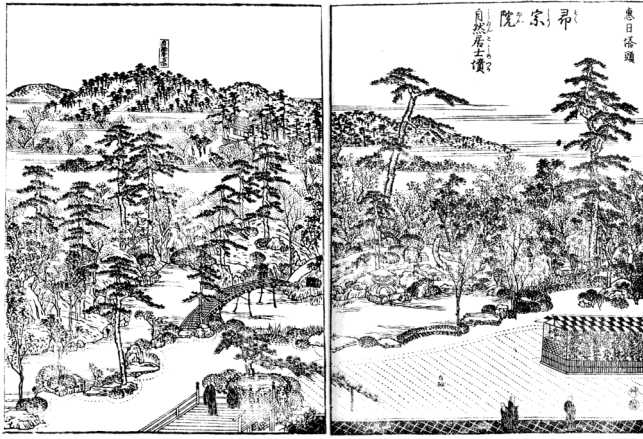


図6 近世の即宗院庭園（『都林泉名勝図絵』より）

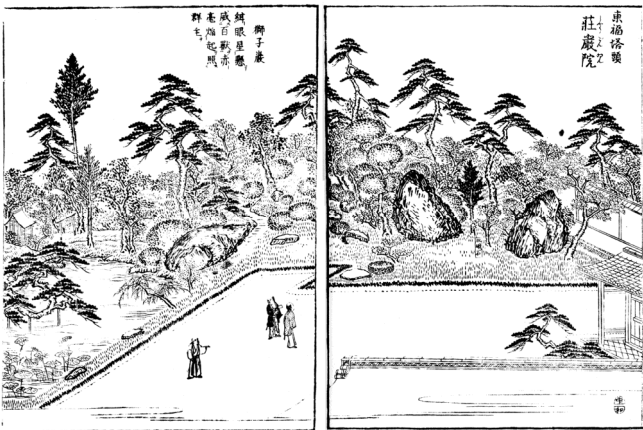


図7 近世の荘厳院庭園（『都林泉名勝図絵』より）



写真1 現在の即宗院の園池



写真2 現在の荘厳院の園池

表1 対象庭園における水源と水みちの整理

	周辺の水源および水みち	現在の園池の水管理
等持院庭園	立命館大学・観光道路の開発により水源消失	循環水・井戸水
智積院庭園	庭園東部に存在した池・蛇ヶ谷の水みちの暗渠化	水道水
即宗院庭園	庭園東部の住宅地開発により水源消失	雨水
荘厳院庭園	庭園東部の水みちの暗渠化	雨水
妙法院御座ノ間庭園	積翠園の売却による水源・水みちの消失	水道水
高台寺庭園	菊谷川が存在する	菊谷川から取水

4．分析に基づく考察

対象とした6カ所の庭園の水源と水みちについて表1に整理した結果を以下のように考察した。

庭園の水源は、かつては周辺に数多く存在した池や水みちであった可能性が高いものが多い。しかし、本研究の対象とした舌状段丘では、砂礫質を有しており水がかりが悪いことから、宅地開発に最適であるという特性がある⁸⁾。そのため、社寺庭園周辺やより山麓部への住宅地開発等に伴い、水源や水みちは消失する傾向にあると考えられた。そしてそのような段丘に位置する庭園の園池は、水源や水みちの消失の影響を受け、雨水や水道水に依存せざるを得ない状況である。特に東福寺荘厳院や即宗院庭園では、園池は水量が著しく乏しい傾向にあり、かつての絵図に描かれた景色とは大きく異なっている。

ただし、高台寺庭園は比較的山麓部の段差の大きな段丘に位置しているため、開発の影響を受けていない水みちの上流部から長いパイプを通して取水を可能にしている。また妙法院御座ノ間庭園については、積翠園の売却という特殊な要因により、雨水や水道水に依存せざるを得ない。そのためこれらは上記の考察の例外として位置づけられると考えられた。

5．結論

京都では、舌状段丘という微地形構造を有する土地において、その豊かな自然条件を生かしてかつて貴族や天皇が多く庭園を営んでいた。しかし近年の山麓部への宅地開発等の影響により、水源の埋め立てや水みちの暗渠化が進み、現在園池の水源は水道水や雨水に依存せざるを得ない状況にあることが明らかになった。

参考文献

- 1) 山田圭二郎：地形文脈における敷地マネジメントに関する景観論的研究、京都大学大学院工学研究科博士論文、2002
- 2) 国土地理院：1:25000 土地条件図 京都、1977
- 3) 下中邦彦編：京都市の地名、平凡社、1979.9、P.210
- 4) 重森三玲、重森完途：日本庭園史大系、社会思想社、1971-76
- 5) 秋里舜福編：日本名所図会全集 都名所図会、名著普及会、1975
- 6) 秋里舜福編：日本名所図会全集 拾遺都名所図会、名著普及会、1975
- 7) 井口洋：都林泉名勝図絵、柳原書店、1799
- 8) 日下雅義：平野の地形環境、古今書院、1973